

国立歴史民俗博物館の愉悅⑥

きんとう 金瑠



金瑠とは耳慣れない言葉である。一見しても、これが何かはよくわからない。5cm四方にも満たない小さな金属製の飾板であり、透彫りで紋様を切抜いた金の薄板を貼付け、その上に大小の金粒を並べ、緑松石（トルコ石）を象嵌している。実は、金細工や象嵌細工の粹を集めた逸品なのである。眩いばかりの輝きを、カラーでお伝えできないのが残念である。

この金瑠、冠の正面を飾る装飾であった。現代だと、制帽の徽章のようなものである。中国王朝の求心力が相対的に低下していた晋代（三・四世紀）に、宮中で皇帝に近侍した侍中や常侍という高官が被る冠を飾った。侍中や常侍は、皇帝が政務を相談する顧問のような存在であり、金瑠が燦然とかがやく冠は、信頼のおける忠臣の証しでもあった。晋書輿服志という、この時代の儀礼

や服飾規定など典礼制度を記した書物には、侍中や常侍の被る冠に、蟬の装飾をもつ金瑠を加え、貂の毛を挿したことを記している。

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の所蔵する金瑠は、千数百年の時間のなかで、金の薄板の一部が剥がれ失われて、傷みは大きい。しかし、朧気ながら蟬の紋様はみえている。金瑠の中央部分では、金の薄板を切抜かず、面に利用しており、ここにうつつらと二つの円がみえる。これが蟬の眼であり、その左下にはアーモンド形の左羽が辛うじてみえる。右下は金の薄板を大きく損なっており、右羽をみることはできない。中央と下辺を結ぶ三角形のなかに蟬がみえてこないだろうか。金瑠は、蟬をモチーフとした装飾だったのである。

なぜ蟬なのであるか。中国でおなじみの龍や虎、鳳凰でなく、蟬であるのはなぜなのか。それは、蟬の生態に由来するようである。蟬は、清らかなる高き美空で過ごし、捕食の生態をもたない。「ものくわぬ」蟬に高潔さを仮託するとは、いかにも世相の乱れたこの時代らしい。縁故や派閥、出自や財力が官僚の処世を大きく左右した世相を感じさせる。

この金瑠、中国各地の晋墓で発見されており、時には歴史書に記録の残る人物の墓から発見されることもある。その中で注目されるのは、書聖といわれる王羲之の故居で発見された山東省臨沂市洗砚池晋墓である。この墓では、三名の乳幼児の埋葬に、金瑠が副えられていた。なぜ乳幼児が手にしえたのか、謎は深い。だが、晋書輿服志が伝える金瑠のイメージと大きく異なることだけは確かである。

理念と実態がかけ離れるのは、世の中の常、ということだろうか。歴博所蔵の金瑠は誰が手にしたのであろう。時勢に乗る権臣であったのか、はたまた良識ある知恵蔵だったのか。蟬の鳴き声のようにはっきりとは聞こえぬが、5cm四方の金瑠が語る小さな声に静かに耳を澄ませてみることにしよう。